

「技」分科会では、「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	飯田市	工業課	久保田 優典
報告者	飯田市	産業経済部長	高田 修
行政	平谷村	平谷村長	小池 正充
行政	豊丘村	豊丘村長	下平 喜隆
経済	浜松商工会議所	浜松商工会議所会頭	御室 健一郎
経済	磐田市商工会	磐田市商工会長	野寄 宏之
経済	御前崎市商工会	御前崎市商工会長	阿形 好男
経済	豊橋商工会議所	豊橋商工会議所会頭	吉川 一弘
経済	田原市商工会	田原市商工会長	河合 利則
経済	新城市商工会	新城市商工会長	本多 克弘
経済	阿智村商工会	阿智村商工会長	藤倉 陽太郎
住民	NPO 法人 三遠南信アミ	副理事	中野 眞
住民	有限会社 燦燦	代表取締役	宮下 彰
パネリスト	延岡市	市長	首藤 正治

(敬称略)

## ■はじめに

### コーディネーター／

#### 飯田市工業課 久保田優典氏

本会の進行でございますが、最初に事務局から今回の分科会のテーマについてご説明をいたします。その後、この隣におられますが、飯田市産業経済部の高田部長より、今日のテーマであります「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」ということに関しましてご報告をいただきます。

その後、意見交換を行いまして、今後推進すべき事業等について論議をしてまいりたいというふうに思います。

それでは、まず事務局から説明をお願い

します。

#### 事務局

それでは、説明をいたします。

今回の議論のテーマは「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」と題しまして、特に前年度の議論の中で出ました大学と行政、また、企業の連携の中で、「人財」というテーマに重きを置きまして行いたいと思います。人財の「財」という字もわざとこのような字にしております。今年の2月にSENA事業で円卓会議を実施して意見交換をしたことも一つの事例でございます。本年はその事業を引き継ぎま

して、さらに発展的に意見交換をするため、また、国内外での経済競争を生き残るために、ものづくりの基幹をなす人財を育成し、その人財が活躍する場を提供していくこと、そして、域外から人財を確保することが重要であると思われまます。

今後、2020年代開通を希望する三遠南信自動車道や、特に当地域におきましては2027年に開業するリニア中央新幹線のインフラ整備とあわせまして、来るべき高齢化社会への対応など、人財の育成・交流は非常に重要な位置づけと考えられます。

産学連携などが強くうたわれます時代の中で、三遠南信エリアの経済発展を人財育成と各地域の特徴を生かした産業集積の側面から考えるため、「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」ということで今回のテーマを設定いたしました。よろしくお願ひします。

## ■ 報告

### コーディネーター／

#### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

それでは、早速ですが、飯田市産業経済部長 高田様よりご報告をお願い申し上げます。

#### 飯田市 高田産業経済部長

皆さん、こんにちは。飯田市産業経済部の高田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は昨年度まで南信州広域連合の事務局長を務めておりまして、この三遠南信サミットにつきましては裏方としてお手伝いをしておりましたが、ちょっと立場が変わりまして、今年度は報告者ということで務めさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

それではスライドを見ていただきながら、

当地域のものづくりの取り組みにつきまして、報告をさせていただきます。

当地域の状況ですけれども、三菱電機、オムロン、シチズン時計などの大企業のマザー工場ですとか、それから、地域の中核的な役割を果たしていただいております多摩川精機さん、夏目光学さんをはじめとしまして、さまざまな精密機械、電子系の企業が集積しております。また、伝統産業であります水引ですとか、それから、半生菓子、凍豆腐などの特徴ある食品産業もあるという、そういった地域でございます。

飯田市の産業政策の組み立てを説明いたしますと、少子高齢化が進む地域におきまして、若者がふるさとへ帰ってこられる産業づくりというコンセプトのもとに、毎年、地域経済活性化プログラムを策定しております。

地域経済活性化プログラム2013では、「支え、育む産業基盤づくり」、「未来を見据えた地域産業の魅力・強み・人材の強化」、「新しい力による新しい産業づくり」の三つを施策の柱といたしまして、10の重点プロジェクトに取り組んでいるという状況でございます。

特にリーマンショック以降におきましては、ものづくり産業における構造変化が激しく、不確実な状況が増しております。そういった意味で、一つの企業が単独で新技術、新産業を開拓・展開していくということは難しい状況になってきておりまして、広域連携はより重要になっているという、そんな状況かと思ひます。

飯田下伊那地域では、広域連合を組織しますとともに、定住自立圏形成協定の締結により、様々な連携を行っております。産業面におきまして、平成20年4月から、国の同意を受けまして「南信州地域産業活性化基本計画」を策定いたしまして、飯田市を含めまして、14市町村において、「高

度ものづくり産業」、「地域風土密着産業」、「頭脳活用産業」の3分野について、産業の集積強化を図ってきているところです。

さらに、県境をまたいだ広範囲な連携といたしまして、平成13年度から国のクラスター計画に基づきまして、三遠南信地域におけます企業間ネットワークの拡大や次世代産業に向けた産業振興施策に取り組んできております。具体的には、平成22年3月に三遠南信地域基本計画が策定され、10年後の基幹産業化を目指し「輸送機器用次世代技術産業」、「健康・医療関連産業」、「新農業」、「光エネルギー産業」の4分野におきまして五つのプロジェクトに取り組んできております。

また、実際の事業実施に当たりましては、三遠南信クラスター推進会議が中心となり、大学や金融機関等と連携をしながら展示会への共同出展、大手メーカーとのマッチング、あるいは人財育成等の事業を展開してきております。

続きまして、当地域のものづくり産業の中核支援機関であります公益財団法人南信州・飯田産業センターの状況ですが、長野県、飯田下伊那の自治体、業界団体等の出捐により昭和50年に設立されております。以来、地域内外の関連機関と連携して様々な産業振興に取り組んできております。

当センターでは、人材育成支援、それから、創業研究開発支援、販路開拓支援、新産業創出支援の四つのメニューを柱にいたしまして企業の支援を行ってきているところでもあります。そのために工業技術センター、EMCセンター、環境技術開発センター等を併設しまして、きめ細かなニーズに対応しております。特に力を入れておりますのは、新産業の創出であり、専門コーディネーターを配置して、航空宇宙産業や健康・医療産業等、新たな事業の展開を図っ

てきているところです。

当センターにおきましては、さまざまな分野で活躍されておられました工学博士ですとか大手企業のOBの方、あるいは社長だった方、大学教授等、それぞれの分野で幅広い知識と人脈、豊富な経験を生かして、ニーズに即して迅速な対応をさせていただいております。

ここからは「新産業育成支援の取り組み」についてご紹介をさせていただきます。

初めに、「航空宇宙産業クラスター形成の取り組み」について申し上げます。

飯田下伊那地域に新たな産業の柱を育成したいということで、今後の成長が期待されます航空機産業に着目しまして、中京圏に近いという地の利と当地域に厚く集積をいたしております精密加工、電気・電子技術を基盤としまして平成18年に飯田航空宇宙プロジェクトを立ち上げました。現在は36社が参画してございまして、航空機部品の共同受注体制の構築、あるいは展示会等への出展を通じての販路拡大・開拓、あるいは技術力向上のための人材育成に取り組んでいるところです。

資料の上段に「現状」と書いてありますが、当地域の受注体制の現状でして、多くの中小企業は機械加工という限られた工程、あるいは一部の部品、1工程しか受注することができないというのが現状です。

現状ではそういう状況が国内に限らず、海外の大手メーカーでは、一定規模のコンポーネント単位、いわゆるまとめて発注をしたいという要求が高まってきており、サプライチェーンの再編等が活発化してきているとのことです。そういう要求に対応できない企業は受注が困難になっていくということになりますので、まさにこの地域で中小企業が連携あるいは共同して、そのニーズにこたえていくということが大きな課題になってきています。

そうした中で、資料下段の貸し工場整備構想ということで、地域内で一貫体制を構築して大手メーカーの発注に対応していきたいということで、貸し工場の整備構想に取り組んでおります。

資料の中には入っておりませんが、その貸し工場整備構想の概要についてご説明します。国・県のご支援をいただく中で、支援機関であります南信州・飯田産業センターと行政が連携をいたしまして、ネックとなっております熱処理ですとか表面処理などの特殊工程を行うことができる貸し工場の整備を行っているところであります。このことによりまして、域内の企業の設備投資意欲ですとか、域外からの誘致促進を高め、実施が可能となる工程幅を広げまして、地域内での一貫生産体制の確立を目指していきたいというものです。

航空宇宙産業の構造をピラミッド型の階層として表した場合、それぞれの企業が階層を1段から2段引き上げることで、国内外からの付加価値の高い受注を獲得していきながら、そのピラミッド自体を大きくしていきたいと考えております。

続きまして、二つ目の「新産業の取り組み」としまして、「健康・医療産業」をテーマに、今年4月、飯田メディカルバイオクラスターが正式に発足をいたしました。これは、健康長寿社会を支える地域の創造を目的といたしまして、地域にあります民間企業、それから大学、県、市町村、関係団体等が一体となりまして、新たな分野に研究の一步を踏み出すことができたという状況です。

具体的な事業の推進に当たり、食品系と医療機器系の二つの分科会を立ち上げ、現在、勉強会等を開催しているところです。この分野では、既に幅広い活動と着実な実績を積み上げておられます、浜松市を中心として組織をされている健康医療産業クラ

スターから学ばせていただくことが多々あるかというように思いますので、より一層の連携をお願いしたいと思いますし、そのような事業を展開していきたいというように考えております。

三つ目の「新産業育成の取り組み」としまして、「環境産業」をテーマに、マイクロ水力発電システムの開発と実証事業に取り組んでいます。マイクロ水力発電システムの開発については、この地域にあります飯田精密機械工業会が昨年当初から取り組みまして、試作機の開発に成功いたしました。その開発された製品を地元の建築士会が設計と工事を担当いたしました。市内の山間部の河川から取水をして、その近くの公園にこのシステムを設置しました。その管理については、地元地区の全面的な協力をいただきながら、現在、性能テスト等の実証実験を行っているところです。

最後になりますが、本日のテーマでもございますが、「人財育成の取り組み」を紹介させていただきます。

地域の持続的なイノベーションをしていくためには、そこにかかわる人財の育成がどうしても欠かせません。当地域では、南信州・飯田産業センターを中心としまして、ものづくりの技術開発の原動力となります実践的な人財、あるいは経営者を育成するために様々な教育機関、支援機関と連携しまして、きめ細やかな体系的な人財育成プログラムを実施しています。将来にわたって次世代産業を創出し、牽引できる人財、あるいは国際的に活躍できる人財の育成に、これからも中長期的な視点から取り組んでいきたいと考えています。

以上、当地域の現在の取り組みを紹介いたしました。当地域のこれからの新産業の取り組みは、飯田市単独ではなくて、南信州地域、三遠南信地域の広域的な連携によって着実に今も実を結んできております



が、これからもさらに連携をしていきたいと思っております。グローバル化が非常に進んでいる中で、今後ますます広域的な連携や産学官金の連携が求められてくると思います。各分野でそうした連携を進めまして、技術力や経済力を高めて、世界とつながり、あるいは世界に売り込んでいくというような形でグローバル化に対応していくことが、これからの地域の持続的な発展の鍵になるのではないかと今感じながら取り組んでいます。

以上、発表とさせていただきます。ありがとうございました。



#### ■意見交換

#### コーディネーター／

#### 飯田市工業課 久保田優典氏

高田部長、ありがとうございました。

今のご発表を私なりにまとめさせていただきますが、飯田市の産業政策ということで、3本の柱というのが出てまいりました。一つは「産業基盤づくり」、それから「人財の強化」、新産業の創出に結びつけた活性化プログラムという手法によって重点推進をしていくというのが最初です。

「地域全体の取り組み」として、コアとなる「南信州地域産業活性化基本計画」、さらにそこを広げた「三遠南信広域計画」推進をもって地域全体の取り組みにしていこうということでした。

計画の推進母体である「公益財団法人南信州・飯田産業センター」の役割のご報告

があったと思うのです。この役割強化を通して、広域ネットワークを広げていくというようなお話がございました。

最後は「新産業の育成支援」ということでした。ご紹介にありましたように、<航空宇宙産業クラスター>と<メディカルバイオクラスター>、それから<環境産業>といった取り組みのお話がございました。さらに、飯田産業技術大学を活用した人財育成と相まって進めているというふうなご説明ではなかったかと思います。

それでは、意見交換に移らせていただきます。

今回は、事前に参加される皆さん方にアンケートをさせていただきました。限られた時間ですので、3点に絞った報告から進めさせていただきたいと思います。

まず、「地域産業に活力を与える取り組み」が一つ目です。次は「人財の育成、確保について」に関する課題と解決策が二つ目でございます。

三つ目は「大学、あるいはその教育研究機関」について。先ほど産官学金というお話がありましたけれども、これらの連携という視点でご意見をいただきたいと思ます。

それでは、まず一番目の三遠南信地域で行われている「地域産業に活力を与える取り組み」について把握してまいりたいと思います。

最初の発言を豊橋商工会議所会頭、吉川さんからお願いしたいと思います。

#### 豊橋商工会議所 吉川会頭

今、お話がありました三遠南信の連携の前提といたしまして、地域が自立をしようということ、東三河では、3商工会議所と13の商工会が昨年の4月に産業振興を図る広域連携組織としまして「東三河広域経済連合会」を設立しました。現在は広

域観光、人財の育成、ものづくり産業の振興プロジェクトに取り組んでいますので、三遠南信、特に東三河について中心にお話をさせていただきたいというように思っております。本日、本多新城市商工会長と、そして、お隣には河合田原市商工会長もおみえになりますが、私どもと東三河広域経済連合会で一緒にやっていたい皆様方ですので、最初にご紹介をあわせてさせていただこうと思っております。

我々は、いろいろなプロジェクトを通じまして、地域の自立ということを考えているわけですが、これは地域のあらゆる資源の総合化、そして融合化をいたしまして広域連携を進め、次の時代に対応した東三河広域経済圏の構築を目指していくというものです。個々のプロジェクトのお話をする前に、これらを立ち上げました理由について少しお話をさせていただきたいと思いません。

東三河広域経済連合会においては、先ほどもお話がございましたように、近年はグローバル化によります産業構造の変化、人口の減少、そして、少子高齢化などにより国内需要が低迷した結果、雇用や所得の減少が見られてきておりまして、これからは人口増加を背景とした経済成長を見込むことは厳しいだろうというように考えております。

そこで、我々は具体的なプロジェクトを立ち上げるに当たり、先ほども申し上げましたように、地域独自の発想を基本としまして、地域の個性や多様性をどのようにして引き出していくかということが重要であると考えました。その上で創造性や感性に価値を見出す新しい地域づくりの発想に立ちまして、地域主権であります企業、人材、資源の融合により地域の経済活動を活性化していこう、そういう必要があるという認識に立ち、このプロジェクトを推進するこ

といたしました。

それでは、これから本題に入らせていただきますが、産業活性化の取り組みということですので、関連します二つのプロジェクトについてご紹介をさせていただきます。

一つ目としましては、「自動車産業ブランディング化プロジェクト」についてということで、お隣にいらっしゃいます田原市商工会の河合会長が責任者としていろいろとおやりいただいております。我々は、全国1位の製造業出荷額の規模を持つ愛知県の中でも、輸送機械産業の10%以上が東三河地域に集積しておりまして、自動車産業につきましては、田原市を中心に関連企業が多く立地しております。そして、豊橋市は外資系自動車企業の立地集積が日本一の地域です。蒲郡地域も含めました三河港臨海部においては、日本のトップクラスの自動車輸出入拠点となっています。

このような自動車産業の集積を生かしたビジネス機会の拡大、そして、人財育成を図っていきたくと考えております。ビジネス機会の拡大ということですが、自動車産業は非常に高い生産性がありまして、これを地域の製造業やサービス産業等の他産業に波及させていくために、企業群系列の境界を超えたオープンな連携を進めることにより、ビジネス機会の拡大につなげてまいりたいと考えております。

また、会員企業の製造現場の中核的人財の育成・強化に向けまして、ものづくりのベテラン技術やノウハウを学ぶことができる企業間交流の機会創出も目指しております。

次に、二つ目としまして、「健康な地域社会創造プロジェクト」というものを今、考えております。ヘルスケア産業は、先ほども少しお話が出ておりましたが、今後の高齢化が進展をしていく中で、新たな主要産業として一層の成長と雇用の創出が見込

まれ、地域における新たなサービス産業やものづくり産業を育成させる絶好の機会であると捉えております。

蒲郡地区には、光学、医療機器、再生医療製品、医薬品等の健康長寿に関連するヘルスケア産業の集積があります。こうした地域特性を踏まえ、東三河地域の多様な資源との連携により、ヘルスケア分野の新産業の創出やヘルスケアツーリズムを展開しまして健康長寿地域を形成していきたいと考えております。

こちらのほうは、具体的に動き出したところですが、蒲郡商工会議所の小池会頭に担当していただいております。

ヘルスケア分野の新産業の創出については、蒲郡地域の再生医療や先端医療分野を牽引する企業の業績を核としまして、新たな企業や研究機関の誘致、健康医療分野に関心をもっている地元企業とのマッチングにより、ヘルスケア産業の創出の集積を図っていききたいと考えております。

このような取り組みを通じ、東三河地域の温泉や食品等の地域資源を効果的に取り込みながら、産業振興の面からも健康長寿地域の形成を目指したいと考えております。

ヘルスツーリズムの展開につきましては、ドイツでは温泉や自然資源を利用した健康プログラムが医療保険制度によって進められており、こうした事例研究を進めながら、若者、女性、高齢者、外国人など国内外の誘客ターゲットに応じた温泉療養体験、自然体験、農業体験、そして、スポーツ体験など、バラエティーに富んだ健康旅行プログラムを提案していきたいと思っております。

地域経済の発展と成長を獲得していくためには、基幹産業であります製造業や地域特性を生かした観光などのさらなる集積、高度化を進めるとともに、それを担う地域に根差した人材の育成を図っていく必要が

あり、地域間競争を勝ち抜ける競争力の強化も図っていくことが重要であると考えております。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

吉川さん、ありがとうございます。本当に多岐にわたったご説明をいただきました。特に東三河広域連合のお話ですとか、二つのプロジェクトについてご説明いただいたので、非常によくわかる内容だったと思います。

この件について、ご質問等もあろうかと思うのですが、只今、お話に出ていました河合さんのお話を少し伺ってみたいと途中で思いつきましたので、田原市商工会の会長でいらっしゃいます河合さんから、特に「ブランディング」のお話がありましたので、ご発言をお願いしたいと思います。

### 田原市商工会 河合会長

先ほど吉川会頭から全体についてのねらい、東三河広域経済連合会としての進め方ということはご説明いただきました。

私からは、最初にお話がありました自動車産業のブランディング化というのをもう少し詳細に説明をさせていただきながら、今、どの程度まで進んでいるかということをご報告させていただきたいと思っております。

この話の始まりというのは、三河港は東三河にとっては宝と言われてはいますが、この三河港は大きな特色を持っておりまして、先ほどお話がありましたように、田原市にトヨタ自動車の田原工場、それから、湖西市のほうからスズキさん、そして、蒲郡地区からは三菱自動車それぞれ海外とか国内ですけれども、出荷をされております。それから、輸入自動車につきましては、世界の車のほとんどの種類がここに入荷されておりました、確か5年連続で日本

一の輸入量を誇っております。その特徴ということでいきますと、自動車に特化されたというか、そこに大きな特徴を持った港ということで、この東三河にとって自動車産業というものを基地として使わない手はないというのが最初の始まりです。

そして、このブランディング化の二つのねらいということで、一つは、自動車産業というのは多くの裾野を持った縦社会の企業群を持っておられます。それが、輸入自動車も含め国内の主なメーカー関連の企業もたくさんあるということで、それを縦の社会でつなぐのではなくて、横のつながりという形で新しい技術、新しいチャンスというものをこのブランディング化の中でつくっていくことができるという形で考えております。

そして、もう一つの大きなねらいですけれども、今までの観光というか、これから地域の活性化のためにはどうしても交流人口を増加させていかなければいけないという話の中で、特に今までの観光とは違う産業観光という部分に力を入れていきたいと思っております。例えば、温泉があるから、こんな特産品があるから集まるということではなくて、その切り口を自動車として、自動車産業を前面に出すと、世界中から人が産業観光として集まっただけの可能性があると想定の中で、いかにして産業観光としていくかということが、今回、中心的な活動になっております。

その参考になっておりますのが、ドイツにありますヴォルフスブルクの町です。そうしたところで進んでおりますカスタマーセンター、それから、その他のあらゆる車をきっかけとした顧客誘致の活動というのを参考にしながら、この地域でできるものを、今、トヨタさんにも入っていただいて、そういう形の会議を進めさせております。

ですから、大きくはその二つのねらい、

技術のクラスター化と、それから産業観光を自動車というものを切り口にアピールできたら、この地域に対して大きな出荷事業費の向上を図れるということで進めております。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

今のご報告では、物流の出入り口としての港湾を持った強みがあり、そこに「車」を作る自動車産業の企業群がある。その出入り口を活かして、観光産業の資源として新たな展開へと広げていく。

それから、交流人口という視点での話がありましたけれども、これも非常に新たな産業としては可能性があるというご説明だったと思います。先ほど吉川さんのお話にも「ヘルスツーリズム」に着目した次の産業への流れというものが大きく示唆されていると感じました。

次は、浜松商工会議所の御室さんにお話をいただきたいと思いますが、今、前段でお二方のお話がありましたけれども、関連することも含めまして、ご報告をお願いできたらと思いますので、よろしくお願ひいたします。

### 浜松商工会議所 御室会頭

三遠南信地域というものは、古くから人・もの・情報、この交流がずっとありまして、ネットワークをずっと形成してきたのではないかというふうに思っています。平成6年から、この三遠南信サミット、これが毎年3地域の持ち回りで開催をされまして、行政、それから産業界、住民レベルで定期的な交流を図っているわけですが、平成20年には地域の共通ビジョンとして三遠南信地域連携ビジョンをまとめ、それを具現化する活動を展開しているわけです。



また、平成22年の3月には企業立地の促進等による地域における産業集積の形成、また、活性化に関する法律に基づく基本計画である、三遠南信地域基本計画を策定しまして、国の同意を得て、平成26年度末までの5年間にわたって、新たな産業、いわゆる輸送用機器の次世代技術産業、それから、健康医療関連産業、新農業、光エネルギー産業といったものの集積と基幹産業化を目指して取り組んでいるという現状であります。

ここで、そうした中から幾つかの具体的な例をご紹介させていただきたいと思えます。

ただいま申し上げました計画に掲げる目標を達成するために取り組みを推進しているのが三遠南信クラスター推進会議というものでございまして、構成メンバーは浜松商工会議所、豊橋商工会議所、株式会社サイエンス・クリエイト、公益財団法人南信州・飯田産業センターでありまして、関東経済産業局の支援を受けて、遠州地域を中心に「次世代輸送用機器産業」・「光・電子産業」・「健康医療産業」の三つ、東三河地域では「新農業」、南信州では「航空宇宙産業」ということで、五つのクラスタープロジェクトにおきまして、県境を越えた連携による新たな付加価値の創造、新産業の創出を目指して、ビジネスマッチングを中心に、今、諸事業を展開しています。

いずれの分野もこれまでも地道に取り組まが行われてきたところではありますが、既に相当なノウハウの蓄積もありますし、技術的な研究などもかなりのレベルで進んでいると認識をしております。

過去2回、3地域のクラスター参加企業が東京の大田区において関東近郊の川下企業と販路マッチング交流会を開催しまして、その成果として、おおよそ1,000万円の商談も成立したという実績もありますし、健

康医療産業クラスターにおいては、医工連携の研究開発によって内視鏡の手術ナビゲーターという画期的なシステムが製品化され、市場の参入も今、進んでいるということです。

また、航空宇宙産業クラスターでは、クラスター参加企業による共同受注グループも発足するなど、着実にビジネスベースへの展開が今、進んでいるという状況です。

加えまして、浜松地域においては、新たな産業の創出と既存産業の底上げを図るために、浜松商工会議所では平成22年度から「浜松地域新産業創出会議」、これを社内に立ち上げました。この内部には五つの研究会、具体的には、「宇宙航空」、それから「医工」、「農商工」、「光技術」、「輸送用機器」があり、これの活動を中心として、ものづくり中小企業の既存技術の高度化、あるいは高付加価値化に資する事業を展開しまして、関係機関との連携も強力に今行っているところです。

今後は、こうした取り組みをさらに進めて新たな市場を生み出して、いかに企業の直接的な売上、トップラインに結びつけられるのかということ、あるいはまた雇用の創出につながるものが求められるわけですが、そのハードルというのは現実的にはまだまだ高いのではないかというように思っております。

産業振興のあり方としては、短期あるいは中期、長期という時間軸で考えていく必要がありますが、三遠南信地域のクラスターの活動の取り組みにおいては、それぞれのプロジェクトがゴールをどこに設定するのかということを確認にして、スケジュール感を具体化しながら製品の可能性を判断していくということも必要になってくるという認識を今現在持っております。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

地域連携ビジョンの概要として、五つのクラスターというお話をいただきました。

具体的な内容の取り組みで成果がどのように上ったかという評価も必要だとされた点、最後に非常に重要なことをおっしゃったなと思います。というのは、短期、中期、長期の施策がありますけれども、どこに目標を置き、具体的にどのような方法でだれが主体的に進めていくかというような、取り組みの幹になる部分の評価もそろそろ必要ではないか。そのご指摘だったと思っております。

今、お三方に発表していただきまして、最後に、豊丘村村長さん、下平さんにまた違う視点から、この地域産業に活力を与える取り組みということでご報告をお願いしたいと思います。



### 豊丘村 下平村長

豊丘村というのは、この飯田市の天竜川の向かい側、反対側の竜東というところにあります。いわゆる農村ということになります。人口7,000人、それから、距離でいいますと、ここの飯田から車で15分ぐらいのところですよ。

皆様ご存じのとおり、9月18日にはJR東海がリニア中央新幹線環境影響評価準備書というものを出示して、路線と駅の間

所が確定しました。2027年、今から14年後には、まずは東京ー名古屋間の営業を開始、その後、10年後くらいには東京ー大阪間の営業を開始というような流れになっております。

東京ー大阪間を67分で結ぶということですから、東京、名古屋、大阪の日本の大都市がリニアというツールを使って、おおむね1時間で結び、それを日本経済の発展の礎にするという大国家プロジェクトだと思います。そのど真ん中にこの飯田下伊那が入ったということの中で、さあ、どうしようということでもあります。

これをひっくり返してみますと、東京、名古屋、大阪、この都市圏の人たちがこの飯田下伊那まで、自宅を出てから多分2時間以内に着ける方々が日本全人口の半分近くはいる、もしかするとそれ以上いるということでもあります。そこへいよいよ三遠南信も乗り込んでいく。物流も確保できる。それも日本最大の製造品出荷額を誇る東海地域から入って来られるということです。

その中で、まずは将来どういう展開になるのだろうということを私なりに簡単に予測はしているのですが、リニア中央新幹線が開通することにより、品川まで40分、品川から16分で羽田空港まで行くことが出来ます。名古屋まで20分、名古屋からセントレアまで40分で行けるといふ、そういう形になります。つまり、ここは海外から訪れても、あっという間に来られるところになり、かつ都市部ではなくて、すごい田舎だということでもあります。この伊那谷の持つすばらしい自然と農業が織りなす日本人の原風景というものを大事にしながら、日本国内のみならず国際的にも売り出していこうと考えています。そのことによって、将来もしかしたらIBMの頭脳集団がいるインドのバンガロールや、シリコンバレーみたいなおところになれる可能性もありますし、

なっていかなくはないかと思っ  
ているところだ。

今現在では飯田下伊那というのは経済の規模は小さいですが、20年、30年後には、「浜松や豊橋の皆さんに三遠南信で飯田とつながっていてよかったなと思っただけのようないい地域をつくり出していかねばいけない」、そういうつもりでいます。

その中で、そうは言っても、まだまだ13年先の話であります。現在、農業が織りなす日本の原風景がすばらしいと言いましたけれども、実は農業はへばりかけてきています。高齢化、それから、後継者不足により、加えて鳥獣害の被害もあるなどして、田園や果樹園が、耕作する人がいなくて山に戻っていき始めているところもあります。農業を何としても守らなければいけないと思っ  
ています。豊丘村としましては、昨年、農業を守るために、農業の6次化を村としてまずはスタートしました。商工農連携により新たなブランド品をつくることを考えました。豊丘村はもともとナシ、桃、それから、マツタケと、すばらしい農産品をいっぱい持っております。それを農業で生産するだけではなく、やはり製品開発や販売まで行うようにする。そのためにどうするのだということで、今、豊丘村としましては、2年目に入りまして部会を三つに分けたりして、40人、50人の人たちみんな  
で新しい商品を考え、新しい売り方、新しい食べ物などの検討を今必死でやっています。

先ほど述べましたように、この豊丘村、それから、飯田下伊那に大都市圏から1時間半から2時間以内でたくさんの方が押し寄せてこられるというときに、この地域において、例えば、群馬県川場村の田園プラザみたいなもの、それから、三重県のモクモク手づくりファームみたいなものを、規模としてはその半分でも、3分の1でも

いいです。まず、そういうものを何とかつくり出してお客さんを迎え入れる。農業の体験をしたり、泊まったり、それから、いろいろなおいしいものを食べたり、買ったり、そういう体験をするところを何とかしてつくるのが重要だと思っ  
ます。

ただし実は、このことは非常に難しいことです。行政が行うことというのは、基本的には、幾らお金を使えば何メートルの道ができる、橋ができる、福祉に幾ら使えばこれだけの福祉ができるということが答えとして必要となる。この6次産業化のことにつまましては答えがありません。しかしながら、難しいからといってやらなかったら、トライしなかったら何も始まりません。豊丘村は、地域の活力向上のために「スタートする」ことから始めております。今年2年目ということで、いよいよどう  
いう組織が推進役になるべきかという調整をしており、これまた非常に難しいことな  
のですけれども、粛々と頑張っていきたいと思っ  
ます。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

今のお話にもありましたように、リニアが14年後ということで、先を見据えた取り組みを粛々とされていると。その中で「農商工連携」で6次産業化のお話がありました。これは豊橋地域でも事例報告いただきましたけれども、従来、農は農という  
ような狭い産業分野でやってきたところから範囲を広げ、事業をより高次元化していくためにはどうしても産業分野間で連携する必要  
があります。

豊丘村だけではなく、今後の全体の広域の取り組みとして、こういうところが切り口となって横に広まっていくと、あるいは先進でやられていることもあると思っ  
ます。

ので、お互いに学び合うというようなことが非常に重要ではないかなという感じを持ちました。

#### **NPO法人三遠南信アミ 中野理事**

浜松に拠点をおいておりますNPO法人三遠南信アミの中野と申します。

産業と人材育成というテーマですけれども、私どもは、この三遠南信地域の中山間地の過疎地域において、まちづくりなどのお手伝いさせていただいております。産業・経済といったときに、大きな経済という視点で今、ご発表があった飯田市の産業など、そういったものはとても大切なテーマだと思うのですが、もう一方で、暮らしのもととなる部分、小さな経済といえますか、そういったこともとても大切なことかなというように感じております。今、豊丘村長のお話にもあったように、その中山間地域における6次産業化というのはとても重要なテーマだろうと思っております。

そうした中で、できるだけ三遠南信地域にあるすばらしい地域資源である農林水産物の物流を活発化するために、この南信州地域、それから、東三河地域、遠州地域で、力不足ですけれども、その販売する機会ですとか、PRする機会を私どもつくっております。ものが動くことによって、小さいけれども仕事をつくっていくということも大切な視点かなというふうに思っています。

それから、人材育成という視点で最近感じているのが、若者たちを中心に非正規雇用の割合が非常にふえている。もっといえば、非正規雇用どころか、アルバイト、ニート、ひきこもりというような人たちが非常に多いというのを、実は都市部を中心に感じておまして、そういった人たちがいかに就業し、労働していくかというあたりで、この三遠南信地域、中山間地域の中で新しい働き方と言えるものも創造していく

ものも大切なテーマなのではないかと感じています。

#### **コーディネーター／**

#### **飯田市工業課 久保田優典氏**

ありがとうございました。

アミさんのメルマガも時々拝見させていただいているのですが、今のお話のように、地域資源をいかに小さな経済の中で生かしていくかという視点は共感できます。人材育成含めてご発言いただきましてありがとうございました。

もうお一方、宮下さん、別な視点でご意見をいただけないでしょうかね。

#### **有限会社燦燦 宮下代表取締役**

人材育成のほうに関するかと思うのですが、農業法人を立ち上げまして、一緒にやる若いスタッフをいろいろな縁で募集しましたところ、意外と都会から若い人たちが来てくれてまして、一緒に農業を営んでおります。ご存じのように、後継者不足が叫ばれておりますが、地元の若い人たちは地元の農業の魅力にはなかなか気づかない、生まれ育ったところの魅力に気づかないままではありますが、都会の若い人たちの中には、こういった伊那谷で農業をやりながら暮らしたいという思いの人が意外と多いなということを感じながら農業をやっております。

ですから、こういった三遠の皆さんと交流をもっと深めながら、松川町にはこういったおいしい果物がたくさんあるよというような、こういう両アルプスに囲まれた環境の中で果物を生産しながら生きていくことができるよというようなことも、どんどんそういう情報は発信しながら、地元の農産物を生産できるように守っていきたいなと考えたりしております。



## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

ここまで6人の方に報告やご意見を伺ったわけですが、最初の「地域産業に活力を与える取り組み」というところについては、これで一旦終わりたいと思います。

皆さんからは、特に産業集積、地域連携と言った重要なキーワードが出てまいりまして、それぞれ特徴のある取り組みをされていると感じました。

多地域から学ぶべきことが多くあるなどという感じを持ちましたし、相互に連携を図れる具体的なヒントもあったと思いました。

それでは、続いて、二つ目のテーマであります「人財の育成の確保に関する課題と解決策」というところに論議を移してまいりたいと思います。

特に地域産業が持続的に発展するためには、それを支える専門家でありますとか、人財、「ざい」は木への「材」ではなくて、「財産」の「財」だというお話がありましたけれども、その人財が必要です。勿論、創造性が豊かであり、アイデアもなくはなりません。

人財の育成・確保は、これから地域にとって欠かせない要件だと思います。今、下平さんのお話にもありましたけれども、農業後継者が地元は余りいないけれども、外から見ると非常に宝だなというような話もありました。これは意味のある示唆だと思います。

継続して人財を発掘し、育てることは社会自体を維持していくために必要です。その際の課題と解決策について報告やご意見をいただきたいと思います。

### 磐田市商工会 野寄会長

「人財育成の確保に関する課題と解決策について」という課題ですが、それ

に当てはまるか当てはまらないかわかりませんが、私の思いを若干述べさせていただきます。

磐田市商工会は約1,900人の会員を擁している商工会ですが、やはり我々は自営業者の集まりでして、従業員数人ということの中で、なかなか人財が養成できないということが現実でございます。

それでも人財を養成していかななくてはならないということで、3、4点ほど活動項目を考えて活動しております。

まず1点目としては、磐田市の近くに理系の静岡理工科大学と、それから文系の静岡産業大学の2大学があるわけですが、その2大学とのいろいろな形での連携を模索しています。先ほど申し上げましたように、2名、3名の従業員いるだけの1商工会員で大学へお願いに行くということはなかなかできないものですから、商工会全体としてお願いをするという形をとって、若干の成果をあげているというのが現況です。

それから、第2点としましては、我々磐田、特に遠州地方は輸送機器産業が工業出荷額として非常に品質として高いわけですが、ご案内のとおり、円安、生産の海外移転等でどんどん大企業が海外に行ってしまう状況です。だから、その状況を手をこまねいて、「死を座して待つ」というわけにはまいりませんので、とにかく大企業の方もぜひ国内にいるという優位性を持っていただいて、我々も小たりとはいえ、技術力とか人的な資源を持って引きとめ策を講ずるということがまず一番の肝要なことだと思います。

しかしながら、海外移転の傾向というのは、これは避けられない事実ですから、できればこのような三遠南信サミットのように、全体の中で異業種の交流もこれから積極的にやっていきながら、産業の膨らみ、厚みをぜひつくっていきたいと思います。

それから、3点目としまして、行政の持つ企業情報の分析及び積極的な活用ということで、技術的な問題ではないのですが、官報から出ている具体的な話を二つばかりさせていただきます。

この出典は国土交通省ですが、2012年の観光宿泊者数の都道府県別全国ランキングというのがあるのですが、その第1位は、やはり4,488万人で東京です。そして、我々静岡県は1,995万人で全国4位を確保していますが、その中で、外国人の宿泊数はどうであろうかとの出典を見ますと、やはりトップは東京の765万人、それで残念ながら静岡県は10位で47万人です。やはりこれから外国の方々が観光でお見えになる中で、今はやりの「おもてなし」というのですか、それとか外国人に対する観光インフラがやや脆弱ではないかということで、この辺りをどうしたらいいのかというような点について、官の持つ情報を積極的に活用しなければならないと思います。

もう一点、一昨日でしたか、日経に載っておりました。職業別の有効求人倍率について、ハローワークの出典だと思いますが、建設が2.4倍、介護サービスが1.85倍、情報処理が1.62倍、機械整備・修理が1.34倍、機械組み立てが0.31倍、一般事務が0.21倍というように有効求人倍率がなっているということは、これからの将来、自分たちが仕事・ビジネスを展開する上で、どこにターゲットを持っていくべきかというの、やはりこういう官の非常に透明性の高いものの資料を活用していくことが、大事ではないかと思っております。

これからの企業は若手を訓練することが一番肝要であろうと思っております。「未来塾」のような講座を開設して、将来への展望並びに事業展開の方向性を探し出すということを、産官学を含めましてやることが重要ではないかと思っております。

ちなみに山口県では「やまぐち産業戦略アドバイザー」ということで、山口県出身の企業人などをアドバイザーとして、若者に、県内の心ある人に講座を開いているという事案もあるようです。やはり、これから将来、未来に向かって若手を育成していくということが肝要であろうかと思えます。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

具体的な内容が幾つか出てまいりました。特に異業種交流という話の中で、産業の厚みというお話がありました。これは私も日々感じている点です。

というのは、1次産業、2次産業の推移、3次産業への移行が急速に進んでいます。就労人口で見れば「ものづくりの分野」は既に20%を切り、70%を3次産業が占めています。実際に産業構造の変化で従来産業から生み出される生産価値とのギャップが拡大し、それらをどういうふうにも評価と是正をしていくか。地域の特徴を厚み（多様性）としてどのように取り込んでいくかというようところが、産業視点で今後は大きな課題にあるのだらうなと思っております。

それから、官報のお話がありましたけれども、日々の情報として提示されるデータベースを十分に活用していないということにお気づきになったという点は非常にすばらしいと思います。

これは実際に「ハローワーク」だけのことではなく、情報としてのネタが随所に潜んでいて、そういうデータを基に政策的にどういうことをやっていったら良いかが見えてくるだろうと思えます。

そこが要点です。どちらかという、引き継ぎの前やったことをまた今年もやるというようなマンネリ化した施策の組み方に警鐘が鳴らされたという理解をいたしました。

示唆的な指摘でありましたので、そういうところに目を向けていきたいなというふうに思います。

### **阿智村商工会 藤倉会長**

最初に、お礼を申し上げたいのですが、阿智村で観光事業の一環としてヘブンスそのはらというスキー場がございます。ここが標高1,400メートルぐらいあり、グリーンシーズンが主なのですが、ここでナイトツアーとうたって星空の観察会を今、展開中です。その事業の一環として七夕の日、7月7日に飯田商工会議所の副会頭を務めていらっしゃる多摩川精機の萩本社長にご講演いただきました。大変お世話になり、ありがとうございました。その際に子どもさんに大勢聞きに来ていただきました。講演が終わった時点で、このときの質問の内容を詳しくは申し上げられませんが、10人の子どもさんから宇宙に関しての質問がありました。私もこの質問を聞いて、当阿智村もものづくりや宇宙に関する関心が子どもたちには高いのかなというような感じを受けとめて、少しばかり安心したような気持ちになりました。

そういうことでありますので、今日は人財の育成というお話でありますので、まずご紹介させていただきますと、当商工会員を平成24年度と平成25年度に中小企業大学校へ派遣をさせていただいております、その節は大変お世話になりました。平成24年度には3名の受講生が行っております。今年度は4名の方がこの中小企業大学校に行ってお受講しております。

それで、当商工会は、その後押しをするために1人当たり3万円を上限として補助金を支給しております。この講習について、10月の末に、その感想というか、レポートが届いておりますのでちょっと紹介をさせていただきますと思いますので、よろしく

お願いいたします。

「この研修を受けて思いましたことは、自分を含め、現状の商品ロスの金額を知らない人が多い。」・「せめて自分たちが製造にかかわった商品ぐらいは知っておく必要がある。そして、今後は月ごとに売上が大きい商品、ロス率を出して目標を定め対策を考え実施し、その結果、今月はどのぐらいロスを減らしたか向上率を出して、目に見える状態に進めていきたい。」・「不良伝票、記録を残しておくのも大事なことだ。」・「不良破棄の内容が明確に残っていき、対策が行われていく際の判断材料になると思う。」といった感想を持ったようです。簡単ではありますが、報告とさせていただきます。

### **コーディネーター／**

#### **飯田市工業課 久保田優典氏**

どうもありがとうございました。

人財育成ということで、中小企業大学校に村としてもそういう人財を派遣していくというお話だったと思います。ありがとうございました。

### **新城市商工会 本多会長**

新城市は、先週の日曜日、全日本ラリー選手権の新城大会が行われました。年間全国で10カ所やるのですが、最終が新城で、2年目です。新城ラリーとしては10回目ということで、知事も巻き込み、トヨタの社長も巻き込みまして、社長自ら出てくれるようになりました。今回、県営の総合公園を使いました。今まで全く使ってはだめだと、なかなかやかましかった、規則のため使わせなかったのを知事の鶴の一声で使えるようにして、そこを会場にして、土日で4万人来ました。これを何とか一つの起爆剤として全国区に持っていきたい。いずれは本宮山スカイラインがありますけれども、

これもなかなかやかましい規制があるのですけれども、これも、そこを使えば世界大会が可能だということです。今、日本で唯一、北海道でやっています。それを新城に持ってこようという計画で、これには知事も乗り気で、トヨタの社長もその気になりまして、かなりトヨタが力を入れてくれまして、半分ぐらいのトヨタの重役が見にきていました。

新城市、第二東名、これは本東名になると思いますが、その新城インターができます。新城ラリーの世界大会に向けて、今、オリンピックの年に何とか合わせようという考えを持っていますが、さらにそういうものを基盤にして、人の集まる場所にビジネスチャンスがあると思うものですから、そのラリーを中心としてまちおこしをしようかと考えています。

二つ目が、新城がもう一つ日本一になったのは軽トラ市です。これはスズキの会長、たまたま私、ちょっと知ってしまして、「スポンサーになってください。」と始めてしまったことです。今、軽トラ市があちこちでできておりまして、今、コマーシャルでも「軽トラ野郎」なんて、あれも軽トラ市用のトラックというか、そこでPRしているみたいですが、会長自ら見に来てくれて、軽トラという意味がよくわからなかったようですけれども、実際に見て、「なるほど、わかった」と理解してくれた。軽トラですと向こうが見えるんですね。普通のトラックだと向こうが見えない。シャッターを閉めていた商店街が日曜日でも開け出す。そういうまちおこしの一つ。これが一番、地域産業に活力与える。ラリーと軽トラ市。

ラリーがなぜできるかというのは、小泉さんが唯一いいことやってくれたのは特区です。新城はアウトドアスポーツの特区をもらいました。アウトドアスポーツでいろ

いろな、今、ツール・ド・新城もありますし、山登り、カヌー、ハンググライダー等のいろいろな全国大会。どぶろく特区なんていうのが東北のほうにありますけれども、新城はアウトドアスポーツ特区をもらったおかげで、いろいろな規制緩和の恩恵を受けながらラリーもできるわけです。公道を走らせるのですから普通だとなかなかできないこと。今、林道を使うなど、いろいろな形でやっていますけれども、いずれは本宮山スカイラインを使って世界大会をそこまで広めていきたいなというように思っております。

私はこの三遠南信サミットの「技」というのは技術のほうかと思って選んだのですが、三遠南信サミットの一番メリットというのは、今日も東三河の商工会議所会頭のお二方がみえますけれども、私、口が悪いことで有名ですが、やはり遠州浜松のやらまいか精神に学べと言いたい。何で山を一つ境にしてこうも違うのかと思う。東三河人はそこへいくと、「やめまいか」が多いものだから、やはりやらまいか精神を学ぶ、こういう三遠南信サミットによって学ぶ、そして、南信州の人の真面目さ。やはりこつこつとやっていく。多摩川精機さんを代表として、今、もういろいろな集積産業が飯田市にあるわけですから、南信州の人に学べと。これは教育の違いかなと思うのですが、気候の違いはもちろんあると思いますが、やはり、そういう意味でこの東三河の人にはいい刺激になっていると思います。浜松と豊橋を比べるだけでもこうも違うし、本当に東三河にとってはいろいろな面で信州、遠州の人に学ぶものが非常にたくさんあると、このように思っております。



## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

地域の活力ということで、最初のテーマにも踏み込んで全体的なお話を伺いました。ありがとうございました。

二つ目のテーマ「人財の育成・確保」についてご報告いただいたのですが、それぞれ地域性も含めて、うまく取り込んだり生かしたりというようなことを広域的に、あるいは分野横断的にやっていくべきとのことでした。また、先ほど情報収集のテクニックの指摘もされました通り、広域におけるの仕組みづくりということが急務になるのではないかなということを痛感をいたしました。

### 磐田市商工会 野寄会長

先ほどの人財育成の中で大学との連携ということをお話しいたしました。会員企業の中で経営革新を取得している機械製造会社があるのですが、その会社が、防災機具として開発した発電機、ガソリンとLPガス兼用の発電機であったのですが、性能評価をすることを当然外部に委託しなければならないといった中で、それを先ほど申し上げましたように、我々、静岡理工科大学と提携をして、交流会の中で「ぜひ性能評価をしていただけませんか」ということを申し上げましたら、「やりますよ」ということになり、具体的にここにあるのですが、発電機の性能評価をしてもらい商品化したという事例があります。やはり、今までのような性能評価会社に依頼するのではなくて、大学にお願いして産学連携をしていくという大きな成果が得られたのかなと思っております。

それからもう一つ、私申し上げましたが、磐田市に静岡産業大学というのがあります。こことも大学の教授等と交流会を開き

まして、経営学や財政部門に関しての講座の開設を商工会の有志、先ほど言いましたように、未来塾、若者を対象に交流会を通じながら講座を開設していただきたいということをお願いし、それも徐々に具体的な話になっているというところまで来ております。こういった意味で、我々のような小さな自営業者でも、学校と連携をしながら、行政の支援を受けながらやっていけるという一つの自信にもなった一例をご紹介させていただきます。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

どうもありがとうございました。

まだほかに、こういった連携については多くの活動があると推測しています。もう少し内容を掘り下げて聞かせていただこうと思いましたが、恐らく他の大学さん、本日、ご報告はありませんけれども、恐らく色々な方面や分野で活動され、実績もあげておられるのではないのかと思います。

### 平谷村 小池村長

今まで、皆さんの話を聞く中で、いかに人財育成が大事なかと痛切に感じたところでございます。私の村は本当に過疎で、小さな、人口も非常に少ない村でございます。以前は林業で栄えたということでありましたが、現在では林業が低迷する中で、私どもの先輩たちが観光立村ということで、すべてのことができるように、温泉があり、スキー場があり、ゴルフ場があり、釣り体験のできる場所もあり、また、パラグライダーで高い山から飛んでくる、そういうことをやって生計を立てているような村でございます。そんな中で、三遠南信が連携する中で私どもも人財育成、また、健康維持のために協力できたらいいかなというふ

うに感じておりますので、三遠南信連携がうまくいって、栄えて発展していくように願うところでございます。

#### コーディネーター／

#### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

参加者の皆さんの熱いメッセージをいただきましたので『まとめ』づらさもありますが、予定した項目3つについては、ここでご報告を終わらせていただきたいと思います。

私からは、この後に「分科会報告」の場がございますので、今までの「技」分科会での報告を簡単にまとめさせていただきたいと思います。

1点目は、3つの報告をいただいたのですが、取り組みとして、国内外からの人・もの・金が集まるような魅力ある産業、あるいは地域連携というような中で新しい産業の創出というようなことを図る必要があるということです。

2点目は、地域連携を深め、事業の発展や拡大を更に加速させていくことが必要だろうと思います。この時、人財をどうやって育てていくかということが大きな課題だろうと思います。そこに焦点を当て、県境を跨いで、お互いの地域が持っている有効な資源、あるいは大学、行政、団体等と結びつけていけるのか、連携した形仕組みをつくっていったらいいのではないかなということといたします。

3つ目は、「SENA」の事業として円卓会議というものが設けられているようですので、そこに今回の分科会の議論を踏まえ、具体的に実施可能な内容をぶつけながら、それぞれの今日ご発言いただいた中のエッセンスを具体的なテーマとして上げていただくということを3つ目にしたいと思います。

以上ですが、結びの前に、せっかく機会をいただきましたので、お隣にお座りいただいておりますお二方にご意見をいただきたいと思います。

「飯田の航空宇宙プロジェクト」「メディカルバイオクラスター」というお話を高田部長からありましたけれども、この分野で中心的に活躍をいただいています飯田商工会議所の萩本副会頭と、先ほどのシンポジウムでも出席されておりました延岡市の首藤市長に分科会のご感想をお願いします。まずは、萩本さんからお願いします。

#### 飯田商工会議所 萩本副会頭

皆さんの貴重なお話をお伺いしながら、そのことを含めて、そして、日ごろ私の思っていることを少しお話しさせていただきたいと思います。

今日は2つのテーマで、1つは大学ということですが、広くいえば人財育成という観点でお話があったのだらうと思います。最初に、新産業創造のための取り組みというテーマだったと思います。ただ、これは私自身現場におりますので、ひしひしと日ごろ感じているわけですが、言うほど簡単ではありません。物すごく時間がかかります。これもまたたびたび言われます産学官が連携したら何かができるのではないかと幻想のように言われますけれども、決してそんなに簡単ではありません。結局、基本的には、この産業を論ずるのではあれば、産が主体でなければ何事も起こらないということを我々は承知をしておく必要があるだろうと思います。官学がどう仕掛けてきても産が動かなかつたら何も起こらないという意味では、産をどう動かすのか、あるいは産がどう動くのかということがとても大事になると思います。そして、技術には突然変異というのはなかなかございません。ですから、穏やかな移転を仕掛けていく以

外にないのだろうというように思います。そのときに、その移転をするわけですが、しよせん突然変異はないので、コアコンピタンスだとかキーテクノロジーという言葉があつてご存知のとおりなのですが、そこをしっかりと踏まえた上で、その技術をどういうふうに展開をしていくかというようなシナリオがとても大事になるだろうと思います。

そして、そのときに最も重要なことは、粘り強くリーダーシップということが鍵になるように思います。そしてまた、意外と若手のアントレプレナーというのが実は地域には埋没しています。そういう人たちを地域から発掘するということがとても大事だと思います。私たちは、今こうして商工会議所だとか権力を持った人たちがミーティングをしているのですが、こういう人にある意味では疎まれていて人たちが、あるいはこういう組織に飽き足らず排除されている人たちが、そういう人たちをどう地域社会が発掘をして、そういう人たちの力を引き出すか、ここが次の時代をつくる上でのとても大事な要件になるだろうと私は思っています。

その次に今度は2番目に、先ほど田原市商工会の会長がおっしゃいましたけれども、垂直分業から水平分業だとか、そういう関連するお話なのですが、私は、これだけ新興国の急成長がある中で、日本の産業の大部分は下請け型の中小企業だと思っています。この構図をどう転換をしていくか、ここに一つのポイントがあると思います。それは、河合さんがおっしゃったように、まさしく垂直分業で、高度成長の時代はそれがとてもぬるま湯で心地よかったです。それで生き延びてきたし、それが高度成長ですから企業の成長にもつながったのですが、今からは残念ながら新興国の大変な急成長がありますので、下請け型の中堅企業、

中小企業では、それと闘わなければいけないという構図をどのように逃れていくかといったら、やはり自立をしていくしかない。下請け型企业から自立型の中堅企業を目指す、そこへポイントを持っていかないとだめだと思います。それを社会全体で育成していくような状況が必要だろうと私は思います。

ただ世の中には、インキュベーションセンターみたいなものをよく行政はつくり上げます。要するに、産めば育つだろうという期待のもとにインキュベーションセンターをつくるのですが、そんなことで育つことはありません。皆さんのお子様のことを考えれば当然だと思うんです。産めばそのまま育つかというと、その後、お乳をやって、保育器で育てて、保育園にやり、小学校にやり、高校にやり、15歳、18歳にならなければ一人前にならないわけです。時間がかかるということと、その育てる仕組みというものをよほどしっかりとつくっていかないと、それは実現できなからうというふうに思います。

浜松の御室会頭さんがおっしゃいますけれども、ゴールはそういうふうにして決めて、しっかりとゴールに向かって仕掛けをつくっていくということがとても私は大事だろうというふうに思います。

人財育成について少しお話をさせていただきたいと思います。

私は、この人財育成についていえば、重層的・多面的なシステムがとても重要になるだろうと思います。3ステージに分けて考えたいと思います。まず幼年期、そして、小中学校あるいは大学までも含めてかもしれませんが、さらに成人になってからと、3ステージについて考えたいと思うのです。まず幼年期。昔は親のお尻について親の働く姿を見続けて成長しました。今の親は、全くそういうふうにご子たちとともに仕事

をするという場面を見せていませんから、子どもたちにいきなり、「職場に入って仕事をせよ。」と言うのは、それはなかなか無理です。ということは、幼年期と現実の社会といいますか、生産現場をどういうように見せて育てるかということにもっと私たちは苦心しないといけないのではないかなというように思います。

先ほど阿智の藤倉会長がおっしゃいましたけれども、夢を見させれば子どもたちは頑張ると思います。私、あのとき宇宙の話をしたのですが、子どもたちがすごい質問をしてびっくりしました。ものすごく宇宙に関心があるんです。すなわち、関心のない私たちの現実を幾ら説明しても、子どもたちを感動させることはできなかならうと思うんですよね。例えば、これが高校、大学に行きますと、今、大学の学科はどんどん名前が変わっています。もう既に古い話なので言っても仕方ありませんが、私たちが卒業したときの学科名なんていうのは既がないわけです。もう全くわからない学科で今は募集をしている。なぜ大学がそのように変わったかといえば、そういう名前をつけてやらないと若い人たちが来ないので。学生を集客するために、大学は必死になって若い人たちが興味を持つ名前をつけて集客しているんです。

では、私たち産業界は一体全体、若者たちにどれだけ興味のある仕事を提供しようとしているのか。あるいはどういう宣伝の仕方をしているのか。こういうことをしっかりと考えないといけないと思います。

産業の世界も同じように、やはりそういうふうにはPRをしていく、そういうふうには事業を転換していくということがとても大事だと思います。磐田市の野寄会長がおっしゃいました、学生と現場との間のミスマッチが雇用の情勢の中にあるのではないかなというご指摘だったと思います。そのとお

りだと思います。

この長野県の北のほうに川上村という農業主体の村があります。その藤原村長とお話ししました。「若い人たちはいっぱい来るんです。うちの村は求人ですと困るということはないんです」とおっしゃっています。すなわち、意外と若い人たちの感性は高いんですね。その高い感性を持った若者をだめにしているのは私たちの現実ではないのか。その若い人たちを育てるように社会そのものが変わっていかないのといけないのではないかなというふうに思います。

今度は成人になってからのことを少し申し上げますけれども、大学なり、小学校や中学校という学園の中ですべてをわかって卒業してきてすぐに役立つなんていうことは到底あり得ないわけですから、現場にもし有効な人材を得ようとするならば、入社させてからしっかりと教育する、その再教育こそ必要だと私は思います。ですから、社員になってから社内留学をさせて勉強してもらおう。先ほどもお話がありました、地域に何とか大学があるとおっしゃいました。地域に何とか大学があっても、地域の産業と結びつくことはまずあり得ません。すなわち大学が地域にあるから、そこと何か結びつけばいいという幻想は捨てるべきだと思います。むしろ、その産業というのは、幅広く世界じゅうを探し回っても、ぴったりフィットする相手というのはそうたくさんはないわけです。でも、そういうところを探し出して、いかに整合させるかというのが産業を育てる上でとても大事になるわけですから、地域を論議すると、地域の大学と連携したらいいというふうにすぐに短絡的に話すということはいよほど注意をする必要がある。もちろんそこに専門の方がいらっしやらないとは申しませんが、そこはしっかりと見極める必要があるだろうし、逆に、そういうふうに近いということ



だけを理由にしないで、幅広く世界じゅうから自分の技術と整合する人たちを見つけて、集めて仕事に結びつけるということが大事だと思います。

たまたま飯田には大学がありません。キャンパスがないからキャンパスレス大学を考えようということで飯田産業技術大学という発想を持ちました。すなわち日本中から、世界中からこれと思う先生を集めてきて、そして、架空のバーチャルな大学をつくれればいいじゃないか。この地域に合った、そういうコースをつくり上げればいいではないかと思う。これが一つのこれからの発想ではないか。キャンパスがあって、そして、そこに勤める教員がいて、その先生たちに全てを地域が期待するという考え方は、これからは余り通用できないのではないかなというように思いました。

## 延岡市 首藤市長

今日は、皆さんのお話をいろいろと伺わせていただいて、大変感銘を受けました。これだけ広い地域において、それぞれの商工会議所あるいは商工会の皆さん方が中心となりながら、こういう形で連携をしておられるということ、非常に勉強になりましたし、本当に感銘を受けたところでございます。

私からは、アドバイスをなんていうおこがましいことはできませんけれども、私どもの地域のことをせつかくですから少しお話をさせていただいて、何か皆さんにとってご参考になる点がその中に少しでもあればというように思います。

先ほどのパネルディスカッションのときにも申し上げましたけれども、延岡市は旭化成の発祥の地でございます。旭化成は、昔は繊維が中心でしたが、最近は随分事業構造が変わってきました、むしろ半導体だとか、あるいは住宅、建材、メディカル産

業関連等々、非常に多角化してきています。昔、繊維が盛んだったころは、延岡市内にレーヨン工場やベンベルグ工場といった工場がたくさんありまして、数十年前は社員数が2万人近いときもありました。今はどうかといいますと、旭化成プロパーの社員数でいえば3,000人ぐらいです。旭化成100%出資の子会社の社員さんを含めても6,000人足らずということで、随分雇用ということでも減ってきました。そして、その中身も、旭化成が中核になりながら地場の協力企業が相まって、延岡の製造業を形づくってきたわけですがけれども、随分姿が変わってきました。というのは、もちろん社員数が減ってきたということもありますけれども、構造が変わってきました、繊維産業だったころは地場の中小企業がいろいろな形で中核企業と結びつきがあったんですね。

例えば、新しく設備更新をするときには、地場の会社がいいろいろとその仕事を受けることができましたし、あるいはメンテナンスも地場でできていましたが、もう随分変わりました。例えば、半導体工場ですと、ニコンとかキャノンみたいな会社から運ばれてきて、どんと据えつけられて、そういったもののメンテナンスは地場の中小企業では基本的にはできないわけですね。ですから、その中核企業と地場企業との結びつきというものが昔と比べるとさま変わりました。ただ、工業製品出荷額自体は余り変わっていません。昔2万人ぐらいいたころも今もそうですが、年間出荷額3,000億円弱というところで推移をしています。

ですから、そういう金額ベースで見ると余り変わらないのだけれども、その中で働く雇用の場がどうなったかということといえば大きく変わったし、また、地場の企業との結びつきというものも大きく変わってきました。

私たちが今思っているのは、そういう古い産業の中で残すべきものはしっかり残していかなければいけないということです。例えば、技術の伝承という意味では、金属加工、あるいはその機械加工といった分野で非常に技術集積がありますので、そういう人たちの技術を伝承していくことが必要だと認識しています。例えば、様々な溶接技術があるかろうと思いますが、そういったものをいかに伝承していくかということが非常に重要だし、その中で、我々も行政として入ってマイスター制度なんていうものをつくって技術の伝承に努めているということの一つあります。

もう一つ、ただ、その古いものがそのままではもう残っていけないわけですから、新しい形の産業に変わっていく、あるいは新しい形の産業を興していく必要があります。今我々は、今日お話ししましたように、メディカルバレー構想というようなものを持ち、メディカル分野を産業振興していこうとしている中で、もちろん旭化成メディカルや東郷メディキットといった既存の中核企業はある程度放っておいてもいいのだけれども、そういったところに、できれば私たちの立場としては、地場の中小企業に参入して行ってほしいと願っています。それでは、そうしたメディカル産業に地場の会社が参入していくに当たって何が必要かと考えたとき、もちろん人財育成というようなことも含めて、そういうところに行政としての関わりというものが出てくると思いますし、必要ではないかというように思っております。

今、萩本社長から、行政の立場にある私たちにとっては非常に耳の痛いお話もありました。行政が中心になってやってもうまくいかないよと。産学官連携ということはよく言われるけれども、産業界が中心になっていかないとうまくいかないということ

は、私たちももう身にしみて感じております。産学官というと聞こえは良いのですが、最後に誰が責任をとるのかということが明らかになっていない。最後に誰が熱意を持って、その形をしっかりと、地べたを這ってでも産業を興していこうとするのかというようなところ、そののこのところについてお互いの思いがいろいろ加減だとなかなか良い結果につながっていかないだろうと思います。やはり産業ですから、その主体となるべきは事業者の方であり、事業者が熱意と責任を持って、ある意味では使命感を持って取り組んでいくことが大前提です。それに対して行政としては、例えば研修、セミナーの場の提供ですとか、様々な情報提供や環境整備ということに関わることができる部分があるのかなと思いつつ、今、取り組んでいるところでございます。

なかなか私どものところも、新産業というものが目に見える形になっていない状況にあります。具体例が1つ2つ出てきている部分もありますので、そういったところを足がかりにしながら、今後もまた頑張っていきたいと思っております。

## コーディネーター／

### 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。萩本さん、首藤さん、ありがとうございました。

限られた時間でありましたけれども、皆様のご協力によりまして、円滑でスムーズに意見交換ができたかなと思います。お礼を申し上げます。

以上をもちまして、「技」の分科会を閉会とさせていただきます。